青年期の性に対する価値観に関する検討

高　村　和　代

A study on the sexual awareness in adolescence

Kazuyo TAKAMURA

Abstract

The purpose of this study is to examine the sexual awareness in adolescence. University students completed a SCT questionnaire. The data are analyzed by the text mining. 14 categories（“partner”, “children”, “affection”, “expression of love”, “lover”, “myself”, “adult”, “desire”, “love”, “offspring”, “human”, “man and woman”, “unknown”, “pleasure”, “communication”）are extracted. Further, as the result of chi-square test, significant differences are recognized in “children” “lover” “adult” “desire” “offspring” “pleasure” “communication”.

Key words

sex awareness, adolescents, text mining

問題と目的

青年は第二次性徴を迎え生殖機能が整うと共に，性愛的関係に関心を持つようになる。フロイトは心理性的発達において青年期を性器期と位置づけ，性器性欲が出現してくると説明している。また，ハヴィガーストは青年期の発達課題として「新しい男女との洗練された関係を築くこと」をあげている。ここで言われる「洗練された新しい関係」とは，第二次性徴を迎え，性愛的関係を意識した異性関係を意味していると考えられる。また日本性教育協会（2012）によれば，2011年における性的関心については，中学生は男子41.8%，女子32.3%，高校生は男子76.6%，女子41.0%，大学生は男子93.8%，女子73.5%と，男女ともに学校段階が上がるにつれて関心が高まっている。このデータからも，思春期以降になると性的関心が高まっていくことが示されている。

さらに，同じ調査報告の中で，2011年の性交経験率を見てみると，中学男子3.8%，女子4.8%，高校男子15.0%，女子23.6%，大学男子54.4%，女子46.8%という結果が報告されている。この報告から，性的関心と同様に性行動経験率も学校段階に従って上昇していく様子がうかがえる。性交経験は思春期以降になって初めて直面する問題であり，青年にとって関心が高いものである反面，受容することに困難を伴うことも多いことが推測される。青年は恋人と親密な関係を構築していくなかで，性交に関わる問題に直面し，そのことによって自らの性に対する価値観を意識化させることとなる。 清水（1979）は身体成熟に伴い性意識が形成され，その性意識に基づいて性行動が促されると述べている。つまり性愛的関係への関心が性に対する価値観を意識化させ，その価値観に基づいて性行動が促進されるのである。このことから，青年自らの性に対する価値

※　takamura@gifu.shotoku.ac.jp

観が，彼らの恋愛や性行動の基盤にあるといえる。

近年は特に性に対する価値観が多様化してきているといわれている。多様化してきた背景として，LGBT などの性的マイノリティに対しての理解が少しずつ進んできていること，以前に比べ性的規範が画一的でなくなってきたこと，性的に開放されてきたことが要因であると考えられる。無藤（2002）は現代社会では青年は多様なステレオタイプ的ジェンダーとステレオタイプに反するジェンダーの間で様々な戸惑いを持っており，その戸惑いは性的な行動によって変えていくものであるため，中学・高校・大学において性的な行動を開始せざるを得ないと指摘している。無藤の述べる戸惑いとは，多様な性的な価値観の存在によって性意識が混乱しやすい様子を述べているといえよう。さらに先の日本性教育協会（2012）の調査報告では，大学生の性交経験率は男女ともに約50％であった。経験した者とそうでない者ではとらえ方に相違がみられる可能性があることから，経験の有無のどちらかが優性であるというわけではないこの結果は，大学生における性交に対するとらえ方が多岐にわたっていることを示唆している。このように大学生の発達的特徴や性交経験率，近年の社会的背景により，現代の大学生は特に自らの性に対する価値観を構築することが困難な状況にあることが推察される。

これまでの青年の性意識に関する研究は，多くが性的行動経験率，避妊に対する知識，婚前交渉に対する是非に関するものであり，青年が性交に対してどのような価値観を持っているのかといった研究は数少ない。中澤（2015）は，日本とスウェーデンの高校生の性行動と性意識を比較した研究の中で，性に対するイメージを「楽しい－楽しくない」「きれい－きたない」「恥ずかしい－恥ずかしくない」の 3 つの形容詞対を用いて検討している。この研究では，日本の高校生はスウェーデンの高校生に比べ，性的イメージは 3 つのイメージすべてにおいて否定的であり，スウェーデンの高校生では性差が見られなかったが日本ではすべてのイメージに対して女子の方が男子よりもより否定的に捉えていた。この研究は性に対するイメージを扱っているが，扱われているイメージは 3 項目と少なく，また具体的な性意識についての検討はなされていない。

具体的な性に対する意識に関する研究では，堀ら（1982）は性に対する考え方として，「セックスは人間にとって大切なものだと思う」「性についての関心がある」「性的欲求はできるだけおさえるべきである」「性に関する事柄についてよく考えることがある」「セックスは楽しいものだと思う」「性に関することを人前で口にすべきでない」「お互いの愛を確かめあうためにはセックスは必要だ」「セックスはいやらしいものだと思う」「男性は女性をセックスの対象としてしかみていない」「性に関する話を聞くのは耐えられない」の10項目を用い検討を行っている。また家庭問題研究所（2002）は，「セックスとは」に対する回答として，「愛情表現」「子どもを作るための行為」「ふれあい」「不快・苦痛」「義務」「自分と無関係」「安らぎ」「快楽」「征服欲を満たすもの」「ストレス解消」の10項目について検討を試みている。しかしこれらの項目は，研究者があらかじめ準備したものであり，実際に青年が意識している内容とは乖離している可能性や，これらの項目以外の内容を報告する可能性もあると考えられる。先に述べたように，近年は特に性意識が多様化してきていることが推察される。また，研究者の世代と現代の青年では性意識が変化してきていることも考えられる。そのため，研究者があらかじめ準備した項目を用いる方法では，近年の青年の性意識についての実態を充分に捉えられていないと考えられる。

そこで本研究では，現代青年の性に対する価値観の実態を把握するために，特に性交経験，セックスに対するとらえ方について青年の生の言葉を抽出することでその実像を明らかにしていくことが第一の目的である。

また，性に対する価値観については，生殖機能の違いなどの理由から性差がみられると考えられる。無藤（2002）はセクシュアリティの性差について，女性は性的行動が長期間なくても耐えられるのに対し男性は性的欲求が強く硬直的で，射精を中心とした性的欲求の充足から離れることができないと述べている。さらに女性は性に対して文脈性があり，状況や場面を大事にし，日常に出会う親しい人を性的欲求の空想相手とするのに対し，男性はファンタジーの役割が大きく，性的描写を含んだ媒体など視覚による刺激を受けやすく，日常的な人間関係を離れたところで性的な空想が展開されるとしている。また中澤（2015）はスウェーデンの高校生との比較の中で，日本の女子高生は男子高生よりも性的関心が低く，ネガティブなイメージを持っていることを明らかにした。家庭問題研究所（2002）の調査でも男子に比べて女子は性に対してネガティブなイメージを持っており，「セックスとは」という問いに対し「愛情表現」「不快・苦痛」は男性より女性が多く回答し，「義務」「快楽」「征服欲を満たすもの」「ストレス解消」は女性より男性が多く回答したという結果が示された。齊藤ら（2006）は大学生に対し調査を行い，性交のとらえ方について「愛情を確かめるもの」は女性が有意に多く，「快楽を得るもの」「性欲を解消するもの」は男性が多いことを示した。これらの研究から，性に対するとらえ方には性差が見られることが明らかとされている。しかし近年では性行動経験率の推移を見ても，女性の性交経験率の伸びが大きく，男性と変わらなくなってきており，女性も性に対して積極的になってきていることが考えられる。さらに男性においては「草食男子」などの言葉に示されるように，性に対する関心が薄れてきているのではないかといわれている。このような社会背景により，性に対する価値観に対する性差にも変化がみられることが考えられる。

そこで本研究では，性に対する価値観の性差について検討を行うことを第二の目的とする。

方法

調 査 対 象：愛知県および岐阜県下の私立大学に在籍する２～４年生252名（男性：71名，女性181名）

調 査 時 期：2014年１月および７月

調 査 内 容：「私の考えるセックスとは」に続く文章を最大５つ作成するよう求めた。

手　続　き：大学の講義時間の一部を利用し質問紙を配布し回収を行った。

倫理的配慮：実施前に調査内容および分析方法，調査協力をすることで生じる危険性がないこと，調査協力は任意であり協力をしなくても不利益を被ることは一切ないこと，個人情報の保護のため無記名で行うこと，回収した調査用紙の保管方法についての説明を口頭で行った。また，調査内容および分析方法の説明については書面によっても行った。

結果と考察

１．性に対する価値観の内容の検討

回収された回答は，1120件（男性295件，女性825件）であり，一人当たりの平均回答数は4.44件（男性4.15件，女性4.56件）であった。集められた回答は，テキストデータを客観的に分析する手法としてテキストマイニングを用いた。なおテキストマイニングの分析には，IBM SPSS Text Analysis for Surveys 4.0を使用した。

まず得られた1120件の回答について形態素解析を行った結果，句読点，助詞，特殊記号を除き抽出されたワードは975語であった。抽出されたワードについて，同様の意味を持つワードどうしを統合させたり，重要でないワードを除外したりするなどの微調整を行った。また抽出されたワードのうち，出現頻度の少ないものは一般性が低いと判断し，本研究では頻度が8以上のものを採用することとした。そのうえで，頻度が 8 以上のワードについて，出現頻度に基づく手法に基づいてカテゴリの自動生成を行った結果，19のカテゴリが作られた。作成された19カテゴリについて，各カテゴリ内の内容を検討し，カテゴリ内で用いられているワードの意味のばらつきが大きいカテゴリを削除した結果，最終的に14カテゴリが残った。カテゴリと出現頻度を Table 1 に示す。

Table 1　抽出されたカテゴリーと頻度

	男	女	合計
相手＋＜＞	13	53	66
子ども＋＜＞	5	41	46
愛情＋＜＞	7	36	43
愛情表現＋＜＞	13	27	40
好きな人＋＜＞	2	28	30
自分＋＜＞	8	17	25
子孫＋＜＞	1	21	22
大人＋＜＞	1	18	19
欲求＋＜＞	9	8	17
恋愛＋＜＞	5	7	12
人間＋＜＞	2	9	11
男女＋＜＞	3	8	11
未知＋＜＞	1	9	10
快楽＋＜＞	8	2	10
コミュニケーション＋＜＞	7	1	8

さらに，分類されたカテゴリ内の回答から，カテゴリの内容についての検討を試みた。その結果，「相手」カテゴリは「相手と深い関係になるもの」などセックスを通して相手との関係が深まることを意味する「関係の深まり」，「相手の欲求に答えるもの」など相手を思いやる内容を意味する「相手への配慮」，「相手の気持ちを確かめるもの」など相手との関係を確認することを意味する「関係確認」の 3 つの内容で構成されていた。「子ども」カテゴリはすべての回答において「子どもを作る」「子どもを産む」など「出産」に関わる内容であった。「愛情」カテゴリは，「愛情を確かめるもの」「愛情を感じるもの」など「愛情確認」を意味する内容が大半を占めていた。「愛情表現」カテゴリはほとんどの回答が「愛情表現」の 1 語で回答されていた。「好きな人」カテゴリは，「好きな人とするもの」など行為の対象を好きな人に限定する「限定対象」を意味する内容で構成されていた。「自分」カテゴリは，「自分をさらけ出すもの」「存在証明」など自らの存在を表明しようとする「存在証明」と，「自分とは縁のないもの」など自分との関わりを否定する「無縁」の 2 つの内容で構成されていた。「大人」カテゴリはすべての回答において，「大人の仲間入り」など経験することで大人になったと感じる「通過儀礼」を意味していた。「欲求」カテゴリは「欲求を満たすこと」など「欲求充足」を意味していた。「恋愛」カテゴリは「恋愛の延長にあるもの」など恋愛の先にセックスが存在しているという「プロセス」を意味していた。「子孫」は「子孫繁栄」「子孫を残す」など次世代に子孫をつなげようとする「子孫繁栄」を意味していた。「人間」カテゴリは「人間の欲望」など人間の「本能」を意味する内容で構成されていた。「男女」カテゴリは「男女の間でおこるもの」などセックスは男女間

での限定された行為であることを示す「限定的行為」を意味する回答が多くを占めていた。また少数ではあるが「男女の違い」を意味する内容も見られた。「未知」カテゴリはカテゴリ名の通りセックスが未知の体験であることを意味する内容で構成されていた。「快楽」カテゴリはセックスを快楽として捉える内容で構成されていた。「コミュニケーション」カテゴリはすべてにおいて「コミュニケーション」の１語で回答されていた。各カテゴリの回答例は Table 2 に示す。

Table 2　カテゴリーの回答文例

カテゴリー名	内容	回答例
相手	関係の深まり／絆（23）	相手と深い関係になるもの
		相手とつながる為のもの
		相手のことをさらに知ることができる行為
	相手への配慮（16）	相手の欲求に答えるもの
		相手を思いやること
		相手に満足してもらう行為
	関係確認（15）	相手の愛情を感じることができる
		相手の気持ちを確かめるため
		相手との想いを互いに確かめられるもの。
子ども	子どもを産む（46）	子どもをつくるためにする行為
		下手したら子どもができる危険な行為
		子どもを作るために必要
愛情	愛情確認（28）	愛情を確かめるもの
		愛情を一番感じること
		愛情を実感する行為
愛情表現	愛情表現（40）	愛情表現
		愛情表現の一種であってほしいもの
		愛情表現の一つ
好きな人	限定的行為（25）	好きな人とするもの
		好きな人としかしたくないもの
		好きな人としかできないこと
自分	存在証明（６）	自分をさらけ出すもの
		自分の存在証明
		自分が必要とされていると感じることができること
	無縁（４）	自分とは縁のないもの
		自分とは関わりのないもの
大人	通過儀礼（18）	大人の仲間入り
		大人への第一歩
		大人への階段
欲求	欲求充足（17）	欲求を満たすこと
		性欲を処理する行為
恋愛	プロセス（８）	恋愛の延長にあるもの
		恋愛の最終段階
		恋愛をする上での一つの過程
子孫	子孫繁栄（18）	子孫繁栄のための手段
		子孫を残すこと
		子孫を残すために必要なこと
人間	本能（７）	人間の本能
		人間の欲望
男女	限定的行為（７）	男女のあいだでおこるもの
		男女の関係の象徴
		男女でするもの
未知	未知（10）	未知の世界
		未知の行為
快楽	快楽（10）	快楽
		快楽を求めるための娯楽
コミュニケーション	コミュニケーション（８）	コミュニケーション

（　）は出現頻度

先行研究（堀ら；1982，家庭問題研究所；2002）では，「愛情表現」や「愛情確認」，「快楽」や「欲求」，「子どもをつくる」などがセックスに対する捉え方として扱われてきた。本研究でも先行研究で扱われてきた内容を示すカテゴリが抽出された。しかし本研究では「大人」「自分」「コミュニケーション」など，先行研究で扱われた内容以外の意味を含むカテゴリも抽出されたことにより，青年がより多様な性に対する価値観を持っていることが明らかとなった。

また先行研究（堀ら；1982，家庭問題研究所；2002）では「いやらしい」「不快・苦痛」など否定的な項目も用いられていたが，本研究の結果からはそのような不快感を示す回答は一般化に耐えうる頻度では得られなかった。家庭問題研究所（2002）では，項目としては「不快・苦痛」を用いていたが，この項目に対して「あてはまる」と回答した高校生は２％にも満たず，この結果と本研究の結果から，青年がセックスに対して不快感を持っていないことが示唆された。しかし，セックスについての知識を得た当初は青年にとって非常にショッキングなものであり，否定的な感情や恐怖感を持ちやすいと推測される。それが実際に恋人との関係を構築するようになったり，周りでセックスの経験などを聞いたりする経験を重ねるにしたがい，否定的な感情が軽減されていくのではないだろうか。そのため，先行研究の調査対象である高校生や本研究の調査対象である大学生では不快感などの否定的な感情が示されなかったが，第二次性徴を迎えたばかりの中学生では異なった感情が生起されることも考えられる。

２．セックス観の性差の検討

各カテゴリについて，被験者による記述の有無と性のカイ二乗検定を行った（Table３）。その結果，「欲求」「快楽」「コミュニケーション」において男性が有意に多く回答し，「子ども」「好きな人」「大人」「子孫」は女性が有意に多く回答しているという結果が得られた。

Table３　カテゴリーの性のカイ二乗検定の結果

	記述なし			記述あり			総計	χ^2値
	男	女	合計	男	女	合計		
相手＋＜＞	60	136	196	11	45	56	252	2.59
子ども＋＜＞	65	141	206	6	40	46	252	6.366 **
愛情表現＋＜＞	58	154	212	13	27	40	252	0.44
愛情＋＜＞	63	150	213	8	31	39	252	1.338
好きな人＋＜＞	69	154	223	2	27	29	252	7.332 **
自分＋＜＞	65	165	230	6	16	22	252	0.01
大人＋＜＞	70	163	233	1	18	19	252	5.33 *
欲求＋＜＞	62	173	235	9	8	17	252	5.526 *
恋愛＋＜＞	66	174	240	5	7	12	252	1.133
子孫＋＜＞	70	160	230	1	21	22	252	6.651 **
人間＋＜＞	68	173	241	3	8	11	252	0.005
男女＋＜＞	68	173	241	3	8	11	252	0.005
未知＋＜＞	70	172	242	1	9	10	252	1.7
快楽＋＜＞	63	179	242	8	2	10	252	13.821 ***
コミュニケーション＋＜＞	64	180	244	7	1	8	252	14.37 ***

*P＜.01　**P＜.005　***P＜.001

「欲求」および「快楽」が男性の回答が多いことについては，斎藤ら（2006）や家庭問題研究所（2002）の結果と同様であった。女性の出現頻度が「子ども」および「子孫」カテゴリにおい

て高いのは，女性は妊娠する可能性があるために妊娠に関わる意識が男性より高まるためであると考えられる。また，「好きな人」という表現が女性に多いのは，無藤（2002）の文脈性を示している様子がうかがえる。つまり男性は空想の性的対象を日常的な人間関係を離れたところで展開するのに対し，女性は日常出会う親しい人を対象にする傾向があることからこのような結果が得られたと考えられる。「大人」の記述が女性に多く見られるのは，女性はセックスという行為に対して超えなければならない壁として捉えていることが示唆される。この結果は男性に「コミュニケーション」の記述が多いことからも対比できる。すなわち男性はセックスを日常的なものと捉える傾向があるのに対し，女性は経験することに覚悟を要するものとして捉えているためであるといえよう。

また，先行研究では「愛情表現」「愛情の確認」など「愛」という概念に基づいた認知は女性に多く見られるという結果が得られていたが，本研究では有意差は見られなかった。先行研究では高校生を対象に行っているものであり，大学生になると実際に恋愛経験を持つ者が増えてくることにより，愛情を持って恋人と接する体験を通して，男女ともに「愛」という概念を意識するようになることが考えられる。また家庭問題研究所（2002）では「征服欲を満たす」という項目に対し男性が有意に多く回答しているという先行研究の結果に反し，セックスが男性のイニシャティブのもとに行われるものというとらえ方が薄れてきていることも考えられる。

総括

本研究では，青年が多様な性に対する価値観を持っていることが明らかにされた。性に対する価値観の内容の検討においては，総じて否定的な内容は抽出されなかったが，中学や高校などまだ性交経験率の低い学校段階においては異なる回答が得られることも考えられる。そのため，学校段階による性に対する価値観の違いも検討していくことが必要であろう。さらに，発達的な違いと合わせて性に対する価値観の形成プロセスについても検討していく必要があろう，特に性意識は親子関係が大きく影響しているといわれている（清水；1979，高橋；2003）。そのため，親子関係など性に対する価値観を規定する要因などの検討を行うことにより，より青年の性意識の発達が明らかにされていくであろう。

また性に対する価値観の性差の検討では，性差については先行研究と大きな差はみられなかった。このことより大学女子の性交経験率が伸びて男子学生と相違がみられなくなったとはいえ，女性は男性に比べて性的欲求は低く，性に対して文脈性を持っていることが示された。性的欲求に関しては，男女による身体的違いが大きく起因していると考えられる。また女性は男性に比べて文脈性が強いという結果に関しては，女性は日常の人間関係の延長上にセックスを捉えているのに対し，男性は性的欲求の強さから即物的なとらえ方をしているからということが推測される。しかし「愛情表現」「愛情の確認」については先行研究では女性の方が有意に多く報告するという結果が出ていたのに対し，本研究では性差はみられなかった。これはセックスという場面において男性がイニシャティブを持つというステレオタイプ的な考え方が薄れてきたことが示唆される。このことから，性に対する価値観は，男女の身体構造の違いによる身体的特徴に基づくものと，時代や環境により変化する文化依存的な社会的背景によるものの両側面により作られていることが示唆される。

青年期発達研究において友人関係や恋愛関係に関する研究は多くみられる。しかし性意識に関

する研究はまだほとんどみられない。性の意識化は青年期になって初めてなされるものであり，青年にとって大きな関心事であると同時に，恋愛関係などの人間関係に大きな影響を及ぼすものであると考えられる。青年期の理解を深めるために，今後青年の性意識の研究が進められることが期待される。

引用文献

堀洋道・福富護・山本真理子・川上義郎・吉田富二雄・川田三夫・松井豊・月村祥子（1982）大都市高校生の性行動に関する研究（１）－性行動・性意識の分析－　日本教育心理学会第24回総会発表論文集　508.

無藤隆（2002）生涯発達心理学からみた思春期の性の発達と恋愛,結婚,出産　日本性教育協会　性科学ハンドブック vol.7　セクシュアリティと心理学の最前線　5-11.

中澤智恵　(2015）スウェーデンの高校生の性行動と性意識　現代性教育研究ジャーナル(日本性教育学会）50, 1-6.

日本性教育協会（2012)「若者の性」白書　第7回青少年の性行動全国調査報告　小学館

兵庫県ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所（2002）青少年の性意識と性行動に関する調査研究報告書　兵庫県

斉藤和佳子・中野朋美・芝木美沙子・笹嶋由美（2006）大学生の性意識と性行動の実態調査　北海道教育大学紀要（教育科学編）56, 47-61.

清水弘司（1979）大学生のおける性の発達と依存対象について　心理学研究, 50, 265-272.

高橋久美子（2003）親の性意識が性教育に及ぼす影響-父親と母親のセックス観をもとに-　日本家政学誌　54, 59-67.